

復興支援の思いをつなげて

橋本有紀

岩手県学童保育連絡協議会 事務局次長

全国の皆さんより、東日本大震災からの復興を支えるあたかい支援金をお届けいただけて、心より感謝いたします。

先日、岩手県内で放映されたコース

番組では、陸前高田市の高台からの埋立で用土砂を運ぶための巨大なベルトコンベアが役目を終え、撤去作業に入ることが報道されました。このように、岩

手県内のニュースでは、復興につながるものも含めて状況を知ることがあります。が、全国の皆さんには、被災した地域の現状を知る機会が減ってきてくるのではないかでしょうか。

大震災から四年が経過しましたが、現地では復旧・復興事業が住民の求めめるスピードとなっており、いま多くの人が不自由な生活を強いられています。一部には明るい話もありますが、聞いていたりするようになつてしましましたが、多くの学校の校

恋せざるを得ず、また、心身の疲労を感じるのもあり、研修や相談の必要性を強く語っています。

岩手県学童保育連絡協議会（以下、県連協）では、震災直後から、全国各地から届けていただいた支援金を活用させていただきながら、支援金の送金・支援物資を届ける、訪問活動・現地指導員と県連協役員の懇談、全国学童保育連絡協議会や県連協主催の研修会への参加費と交通費支援、指導員へのカウンセラー派遣、学校休業日などの保育支援の指導員派遣コードィネートなど、私たちにできる活動を行つてしまつた。

県連協主催の研修会では、そのつど現状報告や、支援についての分科会を設けて、参加者と共に考える機会をもつてきました。また、気仙連協（岩手県三陸海岸の南端に位置する大船渡市、陸前高

庭）では、いわもぬ仮設住宅があり、子どもたちは外遊びが十分でできないという状況がつづっています。

沿岸の被災した地域における学童保育では、震災前から存在した課題に加え、時間が経過するにつれて、新たに発生した困難を抱えたがる日々の生活を経験しています。

「地震が起きたときに避難のことを思い出しおびえて泣きだつてしまつ子供たちがいる」「支援者やボランティアの、結果として配慮のない言葉や行動で、心を痛めてしまう子どもや指導員がいる」など、気持ちが不安定に揺れ動く子どもくの関わり、たくさんの方々が心配を抱いています。保護者への関わりなどにもむずかしさを感じている状況があります。

そうした子どもたちや保護者の支援となる指導員も、現状にじぶんながらおなじみの活動をしていました。

NGOのゼーフ・ザ・ナルドレン・ジャパン（以下、SCJ）のサポートもあり、SCJ独自の研修会の開催や、連協からベテランの指導員を講師として派遣し、現地の指導員との交流も図っていました。

SCJのゼーフ・ザ・ナルドレン・ジャパン（以下、SCJ）のサポートもありました。SCJ独自の研修会の開催や、自治体への訪問活動は、被災した地域の学童保育の大きな支えとなつてもらいました。私たちは、SCJと一緒に数回の懇談会を開催し、情報交換と支援の協力体制をつくりました。県連協の支援活動が十分に行きこなれない部分も多いのですが、SCJの活動や懇談から得る情報は、とてもありがたいものでしたが、サポート事業は二〇一五年一二月で終了になりました。

庭には、いわもぬ仮設住宅があり、子どもたちは外遊びが十分でできないことがあります。

これまでこれからも、岩手県内の学童保育の充実・発展のための活動をつづけ、寄りそった支援を心がけていきたいと思います。